

国際 I C T 利用研究学会 研究会研究論文誌

Transactions of the IIARS

1

2024年 第3巻 第1号
January 2024 Vol.3 No.1

目 次

巻頭言

Transactions of the IIARS No.3 の発刊にあたって

国際 ICT 利用研究学会 理事 菅原 良 1

実践論文

新型コロナウイルス感染症禍でのオンラインによる学生とのリレーションの醸成

神崎 秀嗣（秀明大学 看護学部） 3

論文

次世代型マルチメディア手術教材システムの構築－泌尿器外科手術の事例－

佐藤 礼華（大阪電気通信大学大学院 総合情報学研究科）
高安 健太（関西医科大学） 6

仮想空間における 180 度ステレオ動画の再生手法および VR コンテンツの提案

鎌田 光宣（千葉商科大学） 11

教員養成課程の模擬授業演習における構成的グループエンカウンターの効果

神崎 秀嗣（秀明大学 看護学部／学校教師学部） 16

地方都市の公共施設におけるバリアフリースイレの設置状況及び機能分散化の現状
－青森県つがる市を対象として－

對馬 朱理，西川 友子（山形県立米沢女子短期大学 社会情報学科） 19

東北地方の女子大学生のマイボトルの利用実態と意識の検討

新野 悠，西川 友子（山形県立米沢女子短期大学 社会情報学科） 23

編集後記

上山 俊幸（千葉商科大学） 28

西暦と元号と＜ジャネーの法則＞と

国際 ICT 利用研究学会
理 事 菅 原 良

「光陰矢の如し」とはよく云ったもので、2023年の新年を迎えたと思っていたら、あっという間に 2024 年の新年です。平安時代前期（913 年）の古今和歌集に凡河内躬恒が詠んだ『梓弓春たちしより 年月の いるがごとくも 思ほゆるかな』に似た表現があることから、すでに平安の時代には「弓矢を放つようにときが早く過ぎる」という感覚はあったようです。

この「(年を重ねるごとに) 一年が早く感じる」という現象を心理学的に説明したのが、フランスの哲学者ポール・ジャネが考え考え出した＜ジャネーの法則＞である。

主観的に記憶される年月の長さは年少者にはより長く、年長者にはより短く感じられる」という現象を心理学的に説明したもので、「生涯のある時期における時間の心理的長さは年齢の逆数に比例する（年齢に反比例する）」ということです。簡単に言うならば、生きてきた年数によって一年の相対的な長さはどんどん短くなり、時間が早く感じるということのようです。

人は経験したことがないことをやっているときは、それが強く意識に残り時間が長く感じるが、経験が蓄積されていくと、時間の長さが意識の隅に追いやられ、あっという間に時間が過ぎたように感じてしまいます。改めてこのように説明されると妙に納得してしまうのは私だけではないでしょう。そして、この＜ジャネーの法則＞をさらに加速させているのが、昨今の日時表現における西暦化なのではないかと思うのです。つい最近までは、西暦は私たち日本人にとってあまり馴染み深いものではなく、役所の文書にあるような元号表記のほうが親しみのあるものだったように思います。

元号表記だと今年は令和 6 年です。改めて考えてみると、令和になってからすでに 6 年が過ぎてしまったことに驚きを隠せない会員みなさんもおられるのではないのでしょうか。翻って令和元年にどのような出来事があったのか振り返ってみましょう。当たり前のこと



ですが、今上天皇が即位され「令和」に改元されました。MLB マリナーズのイチロー選手が東京ドームで行われたアスレチックスとの開幕シリーズ終了後に現役引退を表明したのが3月21日のことでした。ゴルフの全英女子オープンで渋野日向子選手が初優勝を果たしたのが8月4日でした。ラグビー・ワールドカップ（W杯）日本大会で日本代表が初の8強入りを果たしたのが9月20日でした。これらの出来事に日本中が歓喜に沸いたことをまるで昨日の出来事のように記憶している方も多いのではないのでしょうか。しかし、これらの出来事からすでに6年も経っているのです。まさに「光陰矢の如し」ですね。

西暦では2019年であり、その年を象徴する印象的な出来事でさえ西暦と一致させることはなかなか至難の業ですが、元号だと6年前の出来事であることが瞬時にわかります。なぜこんなことが起きるのかを考えてみたときに、元号自体が意味を持った名詞であることに理由があるように思うのです。意味の背景には物語（ストーリー）があります。元号には物語との関係性が強く意識され記憶に残るのに対して、記号としての西暦には意味性が希薄であり、結果として記憶に残りにくいということがあるのではないかと思います。ですから、西暦が多く使われ始めている昨今においては、ただでさえ早く過ぎ去ってしまう時間にさらに加速度が加わってしまうように感じるのではないのでしょうか。

ICTテクノロジーの発展に寄与することを目的として設立された本学会も創立8年目になります。

まさに光陰矢の如しです。会員のみなさま、今年は＜ジャネーの法則＞に抗い、時間の流れを自身の手元に引き戻す余裕を意識してみてはいかがでしょうか。

略 歴

2009年 東北大学大学院教育情報学教育部博士後期課程修了 博士（教育情報学）

2010年 北海道文教大学外国語学部国際言語学科准教授

2013年 秋田大学教育推進総合センター特任教授

2017年 明星大学明星教育センター特任教授

編集後記

2024 年を迎え、すぐにこの研究会研究論文誌第 3 巻第 1 号を発行することができました。また、学会の活動も年を重ねて昨年末には第 8 回の全国大会を開催いたしました。これまでの学会の活動にご協力いただき、深くお礼申し上げます。

今回発行した研究会研究論文誌の内容には直接関係しないのですが、SDGs は今後の学会の活動にも関係する可能性があります。ご存じのように国連が 2015 年に発表した SDGs が、我が国でもより広く認知され、議論され、その目標に向かった取り組みが官民をあげてなされています。そのことは誠に喜ばしい限りです。その取り組む姿勢を否定する人はいないと思います。

ただ、ひとつ気になることは、SDGs という、とく自然環境問題や地球温暖化問題だけを取り上げる傾向があり、もちろんそれは重要な目標でありターゲットであることは間違いのないことですが、それ以外の目標やターゲットへの言及が少ないことです。「SDGs イコール自然環境問題解決目標」というような短絡的な認識は避ける必要があります。確かに、「SDGs」という容易に認識できるアイコンを使って自然環境問題や地球温暖化問題への関心を高めることは成功しているといえるでしょう。しかし、それを強調するあまり、逆に他の目標やターゲットがかすんでしまうともいえます。また、SDGs の目標間にはトレードオフの関係になっているものもあり、全体を同時に上げるとそれらの齟齬が表出してしまうたり、範囲が広くなりすぎて収束が困難になってしまったりするという危惧があるのも事実です。

したがって、「分割して統治せよ」ということも有効であると承知していますが、少なくとも SDGs が、自然環境問題や地球温暖化問題だけであると取り違えられてしまうリスクを回避するため、SDGs 全体との関係性、あるいは他の目標やターゲットとの関係性への言及があって欲しいと考えます。そうしなければ、たとえば人権問題や労働問題、あるいは健康経営などがなおざりになってしまうのではないかと心配になります。自然環境問題や地球温暖化問題などを SDGs の枠組みの中で議論しようとして「SDGs」と謳うのであれば、全体と部分ということを明確にしてから記述して欲しいと考えます。

本学会でも今後 SDGs に関連した議論が交わされることが期待できます。是非以上のことにもご配慮いただけると幸いです。これからも社会の ICT 環境を発展・改善に尽力していくために、会員各位の研究活動とその表現である刊行物や発表がさらに活発になることを期待しております。皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

国際 ICT 利用研究学会 副会長

千葉商科大学 商経学部 教授 上山 俊幸

国際 ICT 利用研究学会研究会論文誌 第 3 巻 第 1 号

Transactions of the IIARS Vol.3 No.1

2024 年 1 月 31 日 発行

発行者 国際 ICT 利用研究学会 研究会論文誌編集委員会 (委員長 山下倫範)

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 office@iiiar.org